卷儀集 七部注解 七

中村俊定文庫
文庫 18
1006
16

七部注解七

崇倹集

嵓傔の序

山集の仕掛も孤屋利半郎の為に
まち代の彩よりも亀の窓をもつ心の
多き没前にて十分の七の文字の形をは
もみ分ける筆之

一書、漢相如句、
朝開尾窗夕没心泉
一書、荘子曰　原憲居環土之室、茨以生
草蓬戸不完桑以為枢而甕尾補室

禍心為害
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うつる物の用有るもの
又有（けい）物字之文体之字
是る視のごとくなるは
之等はなり
吟終篇後して秋の風ふく
又くものごとく君の前にうごく
かく作ることを詩の西義に五のふかき
知るべし
王維曰詩有声画画無声詩

大倭のまことの歌と
毛詩西義曰名篇之例義各宜準
之通五分後取一或倫挙両字或全取一
句倫挙則或上或下全取別或画或餘
又有捨其篇一首採章中之一言或後都
遺見文假外理以定称
和名抄五義以篇名別而添
例のごとく仍をうつすものを寫にうつすと
つくなり一也曰まことに格のそ違なや

秋の雨に風のかよひくるあはれ
かくと云ふ一字のよろづ物うき
白露の風のしらべに秋聞えそむる
そ一字移動の作之 聖坡
まて金精の指按琴管の扇を吹れ
こゑをなのてをとなひそて梅の香れる旬の妙を知る
家々に小雨ふる秋の雨一面に雨海たる白雲
村落て少許る過ふる山路よきの多く都方
某公話手百年落尽烟りうる金精張す
家多清きを春の雨過る取つかて 全

是れ枚数の清之赤善清つくそと云ふ事のよ
過とのたるを山家のさんとそて敬句は月の赤を云ふ

上のたるにかつる屋の垂 美
雪国うちそまりくんとそて山雪
わらくそ変化の神をおそ
之赤善にそつまる好よ
又字一さおるのしもも二句の間よ金精あ善
清埼よりの作之

二月のうちそりくんとせはつる 全
数こそ秋の海」さ 坡

拾ひた金で表装もつ
つゞて心ざさゝやかな勤向よ
ろこびもつゝましき句法哉　　婢

　　初午よめ房の紙
　　袋を借て初午の手拭を
　　拾ひ来るもの一言語　春化のかつこう味ひ

又ぶら〳〵もよし冥人　婢

法衣の湯気を送る花曇　　蕪

冥人の拾ひ物なる貧乏神
あをかけ人物さへ冴る
法衣の湯気を送るは

そも〳〵花曇ころの日ざし
暖かすぎてもつゝましき
ものもあるに東のまど窓をひらけ　　蕪

　　魚を食ふく汲の雑炊　　空

送る人なのそもやうち
東窓の雑炊に農家の物置を着こゝろ
ふるまひを自転車一走の
魚を食ふくい客の物と山里五句の運びこそ
ふるまひ
　　初午一夜

未進のこころの

蕪好士楚切
いうこうや 苗字

蕪好者姓ト部 俗称佐吉田業顕之
男也 鎌足大臣之世孫藤原日良麿之
湯ト部姓也蕪好徳夫寺家之法大宝令
乃為国裡直宿後字多院之享四
年崗御下落飾改字為法号進行
諸國又還住吉田及雙岡禁 双岡者在仁和寺之禁下
於是伊賀桂守卿忠者藁旧友好而伊賀

國見山之麓田井庄ニ結菴招今居焉嘗好
和歌揮文筆而寫古今之情著書二巻名
徒然草行乎世而称之當時和歌四天王
亦伊賀蓋蕪好
辛丑年月日寂壽六十八歳 武云観應之年四月八日

今云い人皆の為なるまの世の為にと心得て蕪好も
のこしおきてとゝろの塵を拂ひてとゝろの塵を拂ひ
まの安心ならんやと

うての時雨
仮の世を姫うい舎抱和よま
袖赤の風情をせうとうへ

潮と面降やうて秋の風　牛
姫次うて鮮かくい面津のつ　姫
面降やうては杜絵のまを　雪
又いうさかくとうう事も　牛

まつの書うと面
抱かまうまの小使をう

なうの書うと勧めうとうへの秋のあ歩を会義をお美あみ
多九也書のてうとうへの
抱をよまおい子人之的を解かうと
杜のぬまおい史に斉醤の話をう
まうまの句也

くうとうと面の
心うう　笑　の　波　深　雪　姫
抱きうまおいをりうさとうえる
り事うさんに心送りけとうて
まて送り心のうな

稲書和徳利さん
かうてす　稲書和　徳利さん　おうて出ての

今ふ　六郎の君の御いそぎ
井いそ清水と云ふ所の
六郎の句い二句
六郎の句つき
　　雲もてうきて雪ふりと
　　酒盒の使ふせよ
　　　六郎
　　鞍ふ毋をきて
　　まま猪（カノ）肉

深川まつりて

おもふ事の花咲ますま春の海　孤屋

空の水鳥のそこ迄も　芭蕉

曇なき富士を富士とて解ぬ人　松もを

海川と今も深川まれ山也

よき場を通すあらしの音ばかり　駕水

おもしろと聞て仰ぐ月の中　利牛

霧雲なき空の月　芭蕉

ふるふると蛍のとぶ秋風　孤屋

神さびる水鏡のもりの雪も尚て上張通すあら小雨空と降

酒もなき小雨空と降

酒もなき小雨空と降

酒もなき

きりぎりすの句は初の新秋の句なれども秋風よりも寒き時節と云ふ意にて聞ゆ
切字の働きもなくまた秋の字
髪の句も切字の秋風を入れてもその意のごとくなるを
姉を呼ぶ小記性の後ほど
俤ありや俳文にありそうなもの
俳句を主とせる文とは
の幻術と
風細く松風こまかなる峰かな

水

茶の煙をさけて雲低き
山もとの中に花の静かなり

秋一柳を今日の形見かな

風鈴といふ住方なき俤
動かねば
の秋と結ぶ遠方
死のよいもしくはその御宝
あの声を注ぐ有り難き
や、人心地つけて水そそぐ

杉苔や失ひて
ゆく勝もつ
十二三年の夜寒の
如雷
神六面りて
三義を有
まで
仁智の
又
衆の秋尭は

婆　孤
牛
婆

奈良の秋側
古の人
唯奇蹟
多の
こと凡の
生
様の

奈　細
孤
牛
婆

菊て生ける多佐の幸さき

つまと今の名をいふ一ばの水仙　弧

端の妻のつまより井のえ　牛

瘡の水仙を掬ぶ病まうかとそ名付今日よりつまとせん　城

菊の名所と人のえ病井の神

書をつまとしつゝあるの名を改ゝ一ばの水仙

井のえいなき神ますとえ

菊乃時植まさる支柱　城

きんきの実のいろまつてゐ　弧

芝つまと名ぶる水仙寺　牛

戸をおしつゝ夕芝支柱のいろ　城

粒〻小牛まぐさの実の金もの弘法参るの浄土

ゐ浄土のかなさと弘法参るの浄土

水風呂の水を参るの浄土

戸柱色付

切透を柵と梅のもれ合て　弧

うつゐ十二月の秋いき　牛

雛桃を坐の脇にして主客相対する図

小さい雛棚の飾付をする女

酒をすゝめる客の男の着物の模様

坐の真中の瓶子の口

雛棚の段の数

もく瑞の模様

天満の梅を見る男の着物の模様

唐神をする机の表

もく瑞の模様

雛の前に置く銚子

雛棚を飾り終りて女ども打寄りて雛祭の酒宴をする図

雛棚の段の数

雛棚の前に置く瓶子の口

雛棚の前に置く三方の模様

雛棚の前に置く三方の模様

雛棚の前に置く銚子

雛棚の前に置く銚子

雛棚の前に置く三方の模様

雛棚の前に置く三方の模様

雛棚の前に置く瓶子の口

雛棚の段の数

雛棚を飾り終りて女ども打寄りて雛祭の酒宴をする図

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春物の句をよせて侍る折
雪てふ句をよめる
その事もあれはたゝよ
又冬の句をいたゝく
波立寺のよまれし二首
ゆくりなくうく涙うき
梅の句を枕上に
梅園いそ侍る
牧牛のまい集の序あり
其句の心をうけ祝の場より

牛　孤　城　牛　孤　城

多野の句をよせて
なれ古事拾遺神名
帖あるつゐて
二首侍る小金山
新春野立
くれかゝい駒隔
落葉
一つくらに
詠さに
なめそ

牛

孤　城　牛

孤　城

牛

孤　坡

人々を待 傷ものの
梅雪庵の門いま幸吉大矢の松の一本の枝ぶりて
河の入口まで松も
東玄 燥竹（サキテウ）い 松蟲の雛を
松井のかきを 神前の花うてやわんや
どくどくやともやをかどどうそぞ
水なき鉢の汁いの例の通汁をつ
花の月一雑を 梅ノ東 牛
屠蘇をつ 少し 孤

梅ちるや時の雪の
入梅続くこの月の二月 牛
ふきとりて松のこの茶花をつる 孤
花をつのいこの宝かし 坡
土水のわけくる扇子のけて 牛

武陵公のりに来をそと弥生の碑
ふきをつとい 毎年花の
世の茶をさしくまま
櫻東いセ傳通大矢川の雨そ毎日水をの
海なし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

發向解

慈鎮和尚の初使　　

慈鎮和尚、幼稚の時、ある所へ使ひにやらるゝ。
帰るさに、門前にて、
　ほとゝぎす　いかに鳴くらん　夏の夜の
と、ばかりいひて、帰りにけり。
後の句を、いまだ人、つけず。
慈鎮和尚、
　ほとゝぎす　いかに鳴くらん　夏の夜の
　夢路はかなき　あけぐれの空
とつけ給ひけり。

梅一少

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の月のかくうつくしき夜を
をしみ老の寝ぬる夜
老を慰—二人の追風
月の外もまた外の
物語の夜ふかきまで老を慰む
すい中にあるの
せうまむそは
惟も扇よかくしめ
京いまゐ別
牛

蟻物語 銀合せ
降を望んで
牛

蟻物語 銀合せ 梶
降を望んで 今も雨 牛

蟻物語 銀合せ 富田鈴
降を望んで 今も雨 梶

神奈川九日深川より即興

うき雲の居どころなき秋の海　芭

降こそやさしき雨も荻の声　破

月の秋名物にて雲のさくる間もまつるゝ人の多き

雨もまた好ひ形勢とうそぶきたる亭主の

神とうとし

蕎麦の花郷の小ぶりを枕哉　利牛

ほそ道山の

好物の饅を終る秋の風　全

別ぎはの蕎麦さ　風の音　芭

細のさい迄身にしみて哀也　破

里さ〳〵そゝや八日　孤

しるまさい雁の軍の去る　芭

浅瓜の雫を切て　破

吹もむ山蘭を吹けして　孤

馬よ出ぬか竹の子に　天下一統よ雪を下さい

名句と言えば人の口さがなく馬方の

意気といいつのって気取へさ

いくつぬ限なき神無月　神金いおもくとして

如何ようなる神金の事し地名

山鳥の啼晃も　それを物思ふ　蕪

孤城　落日　斗酒　詩百篇　李白

新細の蓑も着つく雪の上　孤城

吟ぐとも雪にも

河鹿の苦しのく

手地のちよ

手もの紙の句

塔なを野

茶風よ

五千石とうい鳥の句

砂糸い沼の生物を

秋畑い主物まで書きさ

牛　蛙

蕪

牛　孤

蕪

（一時人を添兄と仰ぎ

の神と

笠ゝい唐ゝきゝる畑の
多仲ゝ
河細い高ゝる人の笠ゝきゝ
笠一ゝは茶花の水ゝ
手地のゝは川ゝゝ高ゝる洪水杭の
比強ゝる松ゝ
平地も別義塚ゝの仲
高ゝり向のゝきゝゝて塩野松ゝ出ゝさ川也
笠用ゝ世高ゝる塩野松の高ゝき住吉ゝゝの笠
又ゝゝ
ゝゝ高ゝる大西

女笠の好む　牛
中ゝて倩女ゝ　城
配ゝゝ
笠用ゝ深世ゝゝきゝ
ゝを笠ゝ倩女ゝ
ゝゝ高ゝる大西
次ゝ倩女ゝの
配ゝゝ
風中ゝて秋の

状の記先　牛
命の倩ゝ　城
ゝて秋せ多日　孤
又倩用の状社
ゝ高ゝる秋ゝ倩
ゝは白化の状
牛

鯉のぼり　　孤

夕風に吹きて秋気を報ずる鯉幟の体なり

もろもろの葉の動揺のひゞき　　蕉

風雲のつどうごとく

もゝもゝの花の一月中ばを　　坡

もろもろの楊柳の糸を　　牛

楊萩の葉の動揺のひゞき　　孤

湿（テフ）　魚列切　音蝶　水中ノ黒土又　涂黒也

覚（ミヤク）　莫狄切　索也　明求也　尋也

為ㇾ物多ㇾ紛念の動ずるを湿覚という

さつきのもろもろくれのしらべ

雲の和　　杉風

其ものゝ音の和きを聞て

万音を一声に演ずる新吟

聞ㇾ声而知ㇾ音　　孤

此書いまの世の一言をもて論ずる今吟者多しといへども

詩歌をもて論ずる者稀なり

のうまを立やう古人の農耕の苦を知て詩
耕のあり様を実うつさんとて
主人の耕を命時こそ
雪の風物こそ面白けれ
はのうたうたふ
多くは海の
鵜舟
鮎
秋の水
鴛鴦
聖堂
子
馬の
仏の
稲
次

章雨の一
いねよるのさをもるともと伴ふうまや
の能姫之

白前者は一人まもる浦の妹　豊坡
かつ行く風邪のこゑして旅ちよ上　利合
青くの月をうつる袋うる　佐く
誉体へかる　拘儒
筆庭のこゑつくよ花落て　る冊
行くも山紙　業
新雪時て元禄の家　風
誉一回さを山へかこと　水

自前者は相撲取すとゝ
かゝつ人の一人もそへ
う前人の行程之
旅立の作もかゝ風邪
次のをつうて立
筆庭の三月雪の白妙之
神之
山能へもそ春のゆまをの作
次新雪をかて雨の月を
山へかの雪の川と山川の
雨時を雪を報道る
男神のい時
をかつ

孤松
芳言

次の小野風